

# 「体験的な学び」を教師が体験的に学ぶ研修のデザイン

ーオンラインにほんご人フォーラム 2020 の実践ー

中尾有岐・中尾菜穂・黒田朋斎・新谷知佳

## 1. はじめに

「にほんご人フォーラム (以下、JSF)」は、東南アジア5か国 (インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシア) の中等教育の教師と生徒を対象に、2012年より国際交流基金日本語国際センターとかめのり財団との共催で行われてきた事業である。「にほんご人」とは、国際社会において日本語を使って何かを達成したいという意味を持ち、そのために日本語でコミュニケーションをする人々の総称である。この事業は「生徒プログラム」と「教師プログラム」の2つのプログラムが同時期に連携しながら実施されてきた。「生徒プログラム」では、①若い世代に求められる能力の育成、②にほんご人ネットワークの形成、③若い世代の相互理解の促進とグローバル人材の育成を目的とし、体験的な学びを取り入れ、生徒が主体的また能動的に学びながら、多国籍の生徒同士が協働し、相互作用が起こるような場がデザインされてきた (中尾 2019)。「教師プログラム」では、若い世代に求められる能力の育成を目指した外国語教育のアプローチとして21世紀型スキルを育成する授業や評価を、「生徒プログラム」の観察や模擬授業などを通して考える場がデザインされてきた (木谷他 2018、黒田 2020)。

JSF は、年1回、約2週間の合宿型研修の形で、日本または参加国で開催されてきた。2020年度も同様に実施予定であったが、コロナ禍の影響で対面での実施が困難となり、4日間のオンラインプログラムを試行することになった。試行にあたっては、オンライン環境でいかに「体験的な学び」を創出するか、参加教師はオンライン環境でも「体験的な学び」を取り入れる意義を実感できるか、各教師が教育現場にどう生かせるかが課題となった。そこでオンラインJSFでは、「生徒プログラム」に代わり教師も生徒と共に参加者として「体験的な学び」を体験する「全体プログラム」を行うこととした。そして、それに教師のみを対象とした「教師プログラム」を組み合わせ、「体験的な学び」を教師が体験的に学び、その意義や教育現場への還元を教師自身が見出すことを目指した。

本稿では、この2020年度の「オンラインJSF」の「全体プログラム」と「教師プログラム」について、教師研修という観点からその概要と教師の反応と気づきについて報告する。

## 2. プログラムデザインの背景

### 2.1 これまでの「教師プログラム」

JSF 開始当初の2012年ごろは、東南アジアの中等教育の現場では、21世紀型スキルのような若い世代に求められる能力とは何か、なぜ日本語教育に取り入れる必要があるのかという疑問が持たれていた。そこで、2013年からの3年間の第1フェーズの「教師プログラム」では主に「生徒プログラム」の観察と授業実践の計画の共有が、2016年からの3年間の第2フェーズではさらに実験授業の教案作成と試行、評価方法の検討などが行われた（木谷他 2018）。第3フェーズ1年目の2019年は、「生徒プログラム」の丁寧な観察と議論に加え、教師自身も生徒と同じような活動の体験が加えられた（黒田 2020）。JSF がこのような過程を経ていったのと同時に、東南アジアの各参加国においても、研修や実践が重ねられ、21世紀型スキルとは何かという理解や、それを養うには教育のあり方の転換が必要だという認識が広まってきている。

2020年度はコロナ禍により東南アジアでも日本語科目を含め授業のオンライン化が進んだ。しかし、21世紀型スキルの育成を目指す活動はオンラインでの取り入れ方がよくわからないためか、日本語の授業にはほとんど取り入れられていない状況のようであった。そこで、2020年度のオンライン JSF では、改めて JSF の目的に立ち戻り、以下の2点を主な目的とした。

- (1) 「若い世代に求められる能力」を育成する「体験的な学び」をオンラインで体験することを通して、その意義を感覚的に理解する
- (2) これまで培った21世紀型スキルの知識を土台として、今自分の生徒たちに考えてほしいことは何か、「若い世代に求められる能力」とは何かを考え、教師自身で答えを見出す

### 2.2 「体験的な学び」とは

オンライン JSF で重視した「体験的な学び」では「学びの全身化」と「学びの共同化」を意識して取り入れた。渡部他（2018）の示すそれぞれの定義と効果を表1にまとめる。

表1 「学びの全身化」と「学びの共同化」の定義とその効果

	学びの全身化	学びの共同化
定義	五感を駆使して感じとったり、知識を加工してそれを身体表現につなげたりといった全身を駆使して活動的に学ぶこと	参加者同士がそれぞれの知恵や情報を出し合い、議論を重ね、考えを深めていくこと
効果	座学では得られにくい、感情の揺さぶりを伴う身体性を持った深い気づきが起こる可能性が高まる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個を超えた発想や知恵、行動や成果が生み出される</li> <li>・異なる背景を持つ人々との関係が構築される</li> <li>・自分自身のあり方を反省的に考える</li> </ul>

「学びの全身化」の効果で示されている「感情」はこれまでの教育ではあまり重視されてこなかったが、「感情」を伴った学習経験は、その後の学習者の思考や行動に大きな影響を与えると高尾（2017）でも述べられている。また、「学びの共同化」の効果は、21世紀型スキルに

含まれるコラボレーション、コミュニケーション、創造力、異文化理解などにあたる。

これらの「体験的な学び」を実現するアクティビティの主要なカテゴリーとして、渡部(2020)は、「リサーチワーク」「ディスカッション／ディベート」「プレゼンテーション」「ドラマワーク」の4つをあげている。これまでの「生徒プログラム」では、これらの要素を含んだプロジェクトワークを主軸としたデザインが多く(中尾 2019)、学びを深める段階で全身を使って探求を試みることができるものだったが、オンラインでは環境や時間的に難しい。

そこで、オンライン JSF では、「ドラマワーク」の手法を主軸にデザインした。ドラマワークとは、学習者が、たとえば歴史上の人物や文学作品の登場人物など、自分でない何かに「なって」学ぶ活動のことである。フィクションの世界と現実の世界を往還し、身体や五感まで駆使して学ぶドラマワークは、「学びの全身化」「学びの共同化」を実現させる大きな柱の一つでもある(渡部 2020)。オンライン上では、実際に何かに触れたり、嗅覚や味覚に訴えることはできないが、今の自分でない何かになり、そこに存在し、話をしたり、相手から反応を得たりすることで、身体や心で感じるような感覚的な理解が生じる。教師にとって、体験的な学びの意義を体感するだけでなく、今の自分の生徒に何が必要かを感じるためにも、生徒と共に参加者としてプログラムを体験することが大きな意味を持つと考えた。

### 3. オンラインにほんご人フォーラムの概要

#### 3.1 オンラインにほんご人フォーラムの参加者

2020年度のオンライン JSF は、JSF のオンライン化の試行が目的であったため、新たな参加者を募集することはせず、前年度の JSF に参加した教師と生徒に案内を出し、その中の希望者による自由参加という形をとった。なお、2019年度の JSF の参加者と、2020年度のオンライン JSF の4日間のいずれかに参加した参加者の内訳は表2の通りである。

表2 2019年度の JSF と2020年度のオンライン JSF の参加者 (T: 教師、S: 生徒)

	インドネシア	タイ	日本	フィリピン	ベトナム	マレーシア
2019年度	T:2 S:4	T:2 S:4	S:4	T:2 S:4	T:3 S:4	T:2 S:4
2020年度	T:2 S:4	T:2 S:0	S:3	T:2 S:2	T:2 S:2	T:1 S:3

#### 3.2 プログラムのスケジュール

本実践は Zoom による同期型で行った。オンライン環境による実施であることを考慮し、画面を長時間見る負担と拘束時間の長さによる心理的負担を軽減するため、実施日数は2020年12月と2021年1月で計4日間、1回2時間半程度とした。全プログラムへの参加を推奨したが、気軽に参加できるよう1つだけでも可とした。プログラムのスケジュールと各回の参加人数を表3に示す<sup>(1)</sup>。

表3 オンラインJSFのスケジュールと参加人数 (T:教師、S:生徒)

月	2020年12月			2021年1月	
日	12日(土)	13日(日)		10日(日)	17日(日)
時間	15:00-17:30	10:00-12:45	13:00-14:00	10:30-13:00	10:15-13:00
対象	全体プログラム		教師プログラム	全体プログラム	教師プログラム
人数	T:7名、S:12名	T:4名、S:9名	T:4名	T:3名、S:5名	T:5名
概要	「2040年の同窓会」という設定のドラマワーク	「もう一つの2040年の同窓会」という設定のドラマワーク	座談会形式による全体プログラムのふり返り	「2040年のにほんご人へのインタビュー」という番組制作活動	企画～実施過程の共有と、グループでの活動案作成

### 3.3 各プログラムの活動概要

12月は2日間の「全体プログラム」と、2日目の終了後に「教師プログラム」を行った。1月は「全体プログラム」と「教師プログラム」を1日ずつ行った。「全体プログラム」では目的(1)の「体験的な学び」の意義の感覚的な理解を、「教師プログラム」では目的(2)の今自分の生徒たちに考えてほしいことや若い世代に求められる能力とは何かを考え、教師自身で見出すことを目指した。

12月の「全体プログラム」では、「体験的な学び」のうち、特に「学びの全身化」を重視し、感情の揺さぶりを伴う深い気づきが起こるプログラムを試みた。具体的には、「同窓会 2040 みんなの未来をのぞいてみよう」というテーマで、2040年に「にほんご人」の友だちと久しぶりにZoomで同窓会をするという設定のドラマワークを行った。事前課題は、Zoomの背景画面に使う2040年の自分がいるであろう場所のイメージ画像と、2040年の自分をイメージした服装の準備のみを課した。プログラムは、Zoomのメインルームで全員で行う全体活動と、ブレイクアウト機能を使ったグループワーク(以下、GW)を組み合わせて実施した。グループ構成は、同国と多国籍、教師と生徒という参加者の属性を生かして表4のように組み替えた。②のGWは教師と生徒の合同で、③のGWは生徒のみ、教師のみのグループで行った。2日目は1日目と異なる2040年の自分の姿を準備し、⑤以外は1日目と同様の活動を行った。使用言語は、同国GWでは母語などの共通言語とした。多国籍GWでは主に日本語としたが、必要に応じて、英語などのグループ内の共通言語を使用することも可とした。

表4 12月の「全体プログラム」の「2040年の同窓会」グループ構成図 (T:教師、S:生徒)

活動		①アイスブレイク	②同窓会 同国 GW	③同窓会 多国籍 GW	④同窓会のふり返り	⑤20年後の自分から今の自分へメッセージ
グループ構成	1日目	全体	T・S 合同	T・S 別	全体	全体
	2日目	全体	T・S 合同	T・S 別	国別 T・S 合同	

その後続けて実施した12月の「教師プログラム」は、座談会形式で「全体プログラム」で実施したことを参加者としての視点と教師としての視点からふり返った。

1月の「全体プログラム」では、「体験的な学び」のうち、特に「学びの共同化」を重視し、GWでの関係構築、個を超えた発想や成果が生み出されるようなプログラムを試みた。参加者の設定は12月の「全体プログラム」と同様「2040年の自分」とし、内容は2040年の自分自身だけではなく、自分の周りや社会についても意識を向けられるようなものとした。具体的には、「同窓会 2040 NEXT Stage みんなの未来を伝えよう！-5min first take」というテーマで、グループ内の1人に焦点を当て、その人にインタビューする5分番組を考え、発表するという活動である。1月の「全体プログラム」の活動、グループ構成は表5の通りである。使用言語は主に日本語としたが、必要に応じてグループ内での共通言語を使用することも可とした。

表5 1月の「全体プログラム」の「同窓会 2040 NEXT Stage」の概要（T：教師、S：生徒）

活動	①アイス ブレイク	②番組制作 多国籍 GW	③発表	④ふり返り
グループ構成	全体	T・S別	全体（グループごとに発表）	全体

1月の「教師プログラム」では、ファシリテータらが経験した12月の「全体プログラム」の企画から実施までの過程を参加教師に共有した。参加教師はその過程を追体験しながら、JSFが大切にしていることは何か、12月の「全体プログラム」で大切にしていたことは何かをグループで話し合い、考えを深めていった<sup>(2)</sup>。最後に、自分の生徒に考えてほしいことを出し合い、その中からテーマを決め、テーマに関するオンラインの活動案をグループごとに作成した。

#### 4. 12月のプログラムにおける教師の反応と気づき

「学びの全身化」の体験を重視した12月のプログラムに関して、「全体プログラム」での教師の反応と、「教師プログラム」での語り、各プログラム後のふり返りの記述と12月の全プログラム終了後のアンケートの記述から、参加者として何を感じたのか、また、学びの全身化を取り入れた活動の意義をどのように捉えたのかを分析する。参加者としての気づきを4.1で、活動の意義に関する気づきを4.2で述べる。以下、日本語以外の言語による記述は訳を記す。

##### 4.1 「学びの全身化」体験の参加者としての気づき

12月の「全体プログラム」は、「2040年の同窓会」というドラマワークによる「学びの全身化」の活動であった。生徒だけでなく教師も、画家、農家、ファッションデザイナーなどさまざまな職業について20年後の自分を準備して参加した。1日目と2日目の両日参加した教師4名のうちの2名は、1日目と2日目で全く異なる姿で現れた。教師Aは1日目は画家、2日

目は植物の薬品を研究する科学者、教師 B は 1 日目はブックカフェのオーナー、2 日目はラベンダー栽培と加工のプロジェクト運営者という設定で参加した。2040年の同窓会という同じ活動を 2 つの異なる姿で体験し、感覚的な気づきを得たようであった。たとえば、教師 A は趣味の延長の将来像を描いた 1 日目は幸せな気分になったが、現在の仕事の延長にある将来像を描いた 2 日目は現実的ではあるが、忙しくてあまり幸せではないという感情を抱いたとふり返りで語っている。一方、教師 B は 1 日目に他の参加者の人生を楽しんでいる将来像を見て、自分は人に貢献することばかりを考え、自分を大切にしていなかったことに気づき、2 日目には自分のしたいことを優先した将来像を描いた。教師 B は、2 日目のふり返りの「2 つの異なる 2040 年の自分の気持ちの違いはあるか」という問いに対し、「気持ちはあまり変わらないが、今日は自分の幸せについて考えることが多くなった。有意義な人生を送りたいという気持ちは変わらないが、『有意義』とは何かという定義が少し変わった。」と記している。教師 A、教師 B 以外の教師も、ふり返りに、「私は 2040 年が希望する人生となるために今を大切にする必要があることに気づいた。」「最初は 2040 年の自分のことは想像できなかった。でも、みんなの話を聞いて、だんだん 2040 年の自分のしたいことも想像できた。」と記しており、「学びの全身化」の活動で 2040 年の自分になりきって話をしたり、他の参加者から刺激を受け、座学では得られにくい感情の揺さぶりを伴う身体性を持った深い気づきが生じることを実感した様子が見えられた。

#### 4.2 「学びの全身化」の活動の意義に関する気づき

「教師プログラム」の座談会においては、12月の「全体プログラム」の活動が生徒に役に立つものだと思うかを尋ねた。それに対し、表 6 のような声が聞かれた。

表 6 「生徒に役に立つものだと思うか」という問いに対する教師の意見

- |                                                                                                                                                                                                       |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>a. 生徒は未来のことを考えることができる。生徒たちは夢をかなえるために今からもっとがんばると思う。</p> <p>b. 生徒は自分の夢を想像して、他の人から質問をもらって、もっと深く考えられた。そこから自分の計画もたてられる。このトピックをクラスで話したとき、発表だけだったので、生徒に少し難しかった。ロールプレイをすると考えやすいと思う。計画も一緒にできるともっといいと思う。</p> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

a. は、高校生、大学生の生徒が今後のキャリアを考えること、そのために今すべきことを考えることに役立つと述べている。また、b. は、他の参加者からの質問が自分の夢を深めることになり、そこから自分の将来の計画も立てられる点が役に立つと述べている。さらに、この教師は、将来の夢というトピックで発表する活動と、20年後の将来の自分になりきるドラマワークの活動との違いや、学びの全身化を伴う活動の効果を実感していることがうかがえる。

「2 つの 2040 年を考えるのはどうだったか」という問いに対しては、表 7 の声が聞かれた。

表7 2つの異なる2040年を考えるプログラムデザインに対する感想

- |                                                                                                                                                                                              |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>c. 2つ考えて、いろんな可能性がわかったし、2つの夢を通じて一番大事なことがわかったと思う。1つの夢に向かってではなく、一番大事なことに向かってがんばることがいいと思う。意思決定スキルがあがる。</p> <p>d. 2つの2040年があったら、生徒にとっていいと思う。私たちの生徒のグループは、1回目の夢は難しいと思ったけど、2回目の夢はもっと深い夢になった。</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

c. は、「いろんな可能性がわかった」「一番大事なことに向かってがんばることがいいと思う」と肯定的に評価している。また、「意思決定スキルがあがる」とこの活動を通して育まれるスキルについても言及している。d. は、自国の生徒が1回目に魔法使いというファンタジーの夢、2日目は日本で英語教師という現実的な将来像を描いたのを見て、1日目の夢は現実的ではなく難しいと思ったが、2回目は現実的な夢であり、GWの同窓会で話す中で深い夢になったと感じたと述べている。生徒の将来像の変化やそのときどきの生徒の語りから、2つの将来像を描く意義を実感していることがうかがえた。

アンケートには、12月の「全体プログラム」について、「内容はとても面白くて、分かりやすいし、それに、いろいろ勉強できるようになった。」「おもしろかった。自分のクラスでも使える。」と、楽しく学びがある活動であったこと、自身の現場でも使えるものであると感じている記述があった。対面式フォーラムと比べてよかったことは何かという問いに対しては、「設定を簡単に変更できるので、ロールプレイを実際の状況に近づけることができる。」とオンラインで実施するよさや、「短い」とプログラムの短さを利点としてあげていた。さらに、アンケートの自由記述の欄には、「活動はシンプルだが、とても重要なものだった。活動の後、すぐに自分自身を振り返ることができた。意思決定スキル、論理的スキル、コミュニケーション・スキルなど、多くのスキルが身についた」という記述もあり、若い世代に求められる能力に結びつけて「学びの全身化」の活動の意義を見出している教師もいた。

## 5. 1月のプログラムにおける教師の反応と気づき

「学びの共同化」を重視した1月の「全体プログラム」における教師の反応とその後のふり返りの記述から、「学びの共同化」を体験し参加者として何を感じたのかを分析する。そして、1月の「教師プログラム」における教師の反応とその後のふり返りの記述から、「体験的な学び」の活動の意義をどのように捉えたかを分析する。「学びの共同化」体験の参加者としての気づきを5.1で、「体験的な学び」の活動の意義に関する気づきを5.2で述べる。

### 5.1 「学びの共同化」体験の参加者としての気づき

1月の「全体プログラム」における、5分間のインタビュー番組を考え、発表する活動は、グループで協力して1つのものを創り上げるという「学びの共同化」の活動であった。教師が

グループで行った番組制作では、それぞれが2040年の自分について紹介した後、誰に焦点を当てるかを決め、話し合いながら番組の中での配役、主役 A やインタビュー番組の具体的な設定などを決めていった。最終的に教師グループは表 8 のような発表を創り上げた。

表 8 教師が制作した番組の主役の設定と番組内容

主役 A の設定	30人のチームで世界をかけまわり、それぞれがいろいろな分野の仕事をしている。A も村を助けるボランティアメンバーの一員で、教育を担当している。今はアフリカのブルンジで5～7歳の子どもの文化や言葉を紹介する活動をしている。いろいろな人と出会うのが楽しい。
番組の内容	ニュース番組で、ニュースキャスター B が中継先にいるキャスター C を呼ぶ。キャスター C は主役 A と、その生徒 D に対し順番にインタビューする。

番組を考える過程で、2040年のアフリカはどんな様子か、世界はどうなっているか、そこに自分はどのように関わるかといった社会にまで目を向けた内容が話し合われていた。主役以外の人はグループ活動中に将来像を広げることができなかったが、ふり返りの際に、2040年に自分の周りはどうなっているか、周りの人は自分に対してどんなことを言っているかを考える質問を提示したところ、それぞれの教師が未来の社会とそこに関わる自分を想像していた。たとえば、ある教師は、表 9 のように2040年の社会や教育のあり方について言及していた。

表 9 2040年の社会や教育のあり方に関するふり返りの記述

2040年、みんなは世界を住みやすくするためにベストを尽くしている。私たちの間にある違いについて誰も心配していない。人種、宗教、文化の違いはなく、私たちはお互いに学び合い、尊重し合っている。私たちは自分の強みをそれを必要とする人のために活用する。(略) 学校はもはや試験をする場所ではない。私たちは楽しくプレイし、知識を共有する。私は教えるのではなく分け合い、また生徒たちから多くを学ぶ。

1日2時間半のみの短い限られた時間であったが、12月、1月と一貫したテーマでつながるセッションを受け、自分自身のキャリアだけではなく、社会やこれからの教育のあり方へと考える範囲を広げ、深めていったことがうかがえた。

アンケートでは、印象に残った活動として「発表の準備」と「発表」があげられ、その理由に、前者はたくさん日本語で話すことができたことを、後者はグループごとの創造性が見られたことをあげていた。「発表」と答えたある教師は表10のように理由を詳しく記述している。

表10 発表の活動が印象に残った理由

私は「発表」の部分が一番好きです。グループで協力してお互いに助け合い、「未来」でさまざまな役割を担うことができます。興味深いし、グループの間に創造性を見ることができます。また、この活動を通して、彼らがどのようにして報告のスピーチを学ぶことができるかがわかります。とても刺激的な活動です。とても気に入ったので、クラスで使ってみようと思います。

この教師は自分のグループ活動の体験と生徒の発表の観察から、生徒たちがどのように学ぶ



かを理解し、授業にも取り入れたいと思うに至っている。

対面式のGWとオンラインでのGWは何か違いがあったかという問いに対しては、違いはあまりないと答えた教師がいる一方で、通信の障害の問題をあげる教師、話し合いは対面式のほうがもっとうまくいくと答えた教師もいた。ただ、どの教師も活動自体はおもしろかった、役に立つと評価しており、「学びの共同化」は対面時と比較すると難しい部分もあるが、オンラインでも取り入れられる意義や可能性を感じたのではないかと思われる。

## 5.2 「体験的な学び」の意義に関する気づき

1月の「教師プログラム」では、グループで「JSFが大切にしていることは何か」「12月の『全体プログラム』で大切にされていたことは何か」について話し合いを重ねた後、自分たちが考える活動のテーマとして、生徒たちに今考えてもらいたいことをあげてもらった。教師からは、「自分が好きなことを知ってほしい」「成功とは何か」「思いやり」「How to live with others」など多様な案が出た。その中から教師たちで相談して選んだテーマは、「How to live with others」であった。それをテーマとした活動を考えるGWでは、12月、1月のほとんどのプログラムに参加した教師グループと、1月の「教師プログラム」がほぼ初参加である教師グループに分けて行った。ほとんどのプログラムに参加した教師グループが考えたのは表11の活動であった。

表11 教師たちの考えた活動案

テーマ	How to live with others
Lesson 1	①ある他の惑星に住めるかを試すために人々を送るというシナリオを提示する ②くじで生徒に職業を割り当てる ③役割（国籍や職業など）が異なる生徒同士のグループに分ける ④グループの中から誰を他の惑星に送るかを話し合って決める ⑤ディスカッションの結果を Google スプレッドシートを使って発表する ⑥グループ間で話し合い、誰を惑星に送るか決める ⑦自分たちの選択の正当性を示し、コミュニティを機能させる方法を考えてもらう
Lesson 2	惑星に到着後の新しいコミュニティを計画する（自分たちの町の都市計画や義務を考える）

「体験的な学び」についてファシリテータが明示したわけではなかったが、表11の活動はある役になりきることで、身体表現につなげたり、五感を駆使して感じとったりする「学びの全身化」の要素と、それぞれの知識や情報を出し合い、議論を重ね、考えを深める「学びの共同化」の要素が含まれた案であった。そして、この活動内で話し合う内容には、生徒たちにこれからの社会で生きていくために考えてほしいことが取り入れられ、さらに、異なる背景を持つ人々との関係構築を考えたり、新たな解を他者と共創していったりするものでもあった。

すべてのプログラムに参加し、この活動案も考えた教師の1人は、ふり返りの「今日気づいたこと」という項目に表12のように記述している。

表12 ある教師の1月「教師プログラム」の振り返り「今日気づいたこと」の記述内容

自分のオンライン授業で、活動を忘れていたことに気づいた。メッセージを伝えることに重点を置いてしまい、インタラクティブになっていなかった。このセッションを通して多くの可能性に目を向けることができ、オンラインクラスで使えるツールやアプリについて詳しく知ることができてよかった。また、授業の目的のような一般的なことでも、答えを明らかにする前に生徒にブレインストーミングと推測をさせた方が効果的であることに気づいた。そうすることで、生徒は自分自身の目標として授業にのぞむことができるだろう。一方で、トピックを成功させる秘訣は、生徒が未来を「見る」ことができることと、特定のスキルの習得の必要性だと思う。それについて話すことは何の役にも立たない。生徒たちはそれを感じとる必要があるので、五感を優先する必要がある。また、グループのメンバーと補い合うことによって自分がよりうまくできたことから、チームワークがいかに自分を成長させてくれるかに気づいた。メンバーからたくさんのことを学び、本当に楽しかった。これこそ私の生徒たちにも体験させたい。つまり、生徒たちに、友達と助けあって学びの過程を共に向上させていくことを許し、教師は（自分が向上させるのではなく）それを促したほうがいい。

この教師は、「自分のオンライン授業で、活動を忘れていた」「インタラクティブになっていなかった」と自身の授業が、生徒が主体的かつ能動的に学ぶ場になっていなかったことを反省している。また、オンラインで使えるツールやアプリ、活動方法といった情報を得たことだけではなく、「生徒が未来を『見る』」という生徒自身にとって何が重要かという視点を持ってテーマを考える必要性にも言及している。そして、「生徒たちはそれを感じとる必要がある」と五感を駆使して活動する「学びの全身化」の意義を見出したこと、「自分がよりうまくできたことから、チームワークがいかに自分を成長させてくれるかに気づいた」と「学びの共同化」の意義を自身の体験から見出したことを記している。また、「これこそ私の生徒たちにも体験させたい」「教師はそれを促した方がいい」と述べ、「メッセージを伝えることに重点を置いて」いた自分を反省的にとらえ、教師の重要な役割は知識や情報を生徒に与えることではなく、生徒自身が学びあえる環境を作ることであると考えてようになっている。他の教師たちも、気づいたこととして、おもしろい授業のために教師がすべきことに「生徒の気持ちもよく考えること」をあげたり、「学習者に何を何のために習得してほしいか」を考える必要性をあげたりしていた。

このように、「全体プログラム」での参加者体験を経た後に、教師のみでプログラムについての話し合いをすることを通して、今自分の生徒たちに考えてほしいことや若い世代に求められる能力は何かについて考えをめぐらし、それぞれの教師が自分の中でその答えを見出していた。

## 6. プログラムの成果と今後の展望

本稿では、「体験的な学び」を体験的に学ぶことを目指してデザインした、生徒と教師がドラマワークを通して共に学ぶ「全体プログラム」と、それを教師のみで振り返り理解を深める「教師プログラム」について、教師研修という観点からその概要と教師の反応を報告した。

本プログラムの目的 (1) の「『若い世代に求められる能力』を育成する『体験的な学び』を

オンラインで体験することを通して、「その意義を感覚的に理解する」に関しては、12月、1月の「全体プログラム」で教師自身が「学びの全身化」や「学びの共同化」という「体験的な学び」を体験し、その効果や意義を感覚的に捉えたことがうかがえた。また、目的(2)の「これまで培った21世紀型スキルの知識を土台として、今自分の生徒たちに考えてほしいことは何か、『若い世代に求められる能力』とは何かを考え、教師自身で答えを見出す」に関しては、「全体プログラム」での参加者体験と生徒の観察を経てから、続く「教師プログラム」で、体験や観察で感じたことを言語化し、さらに他の教師とディスカッションを重ねることで理解を深めていき、それぞれの教師が自分の中からその答えを見出したことがうかがえた。

しかし、「全体プログラム」と「教師プログラム」の計4日間のプログラムにすべて参加した教師は2名のみであった。1月の「教師プログラム」のグループ活動では、ほとんどのプログラムに参加したグループと、1月の「教師プログラム」がほぼ初参加のグループに分けたが、後者の教師のグループは、オンラインでできる活動という活動の「型」により興味を示す傾向があった。本実践のような「知識」ではなく「体験の場」を提供する研修の形は、参加回数が異なっても共に参加でき、それぞれの教師が今必要としていることを教師自身で見出すことができる自由参加に適した形であったと思われるものの、参加回数が少ない教師は「若い世代に求められる能力とは何か」を根本から考え、理解を深める段階には至らなかった点は課題である。今後、多忙な教師が無理なく参加し、より理解を深められる開催方法の検討が必要である。

ただ、「全体プログラム」での教師の参加者体験は予想外の効果もあった。渡辺(2017)は、演劇的手法と教師教育との一般的な結びつきは、①教師から子どもたちへの働きかけ方(特に、話し方や手振り・身振りの使い方)を演劇的手法を通して学ぶこと、②授業において演劇的手法を用いた学習を行っていくためにその手法について学ぶことであるが、③根源的に「教師としてのあり方」の問い直しを志向するものも考えられると述べている。①や②はすぐ実践に取り入れられるものだが、そのみに留まってしまうことは、子どもを動かすための活動の型ばかりを身につけようとすることになりかねないと指摘している。一方、③は、すぐに「役立つ」ものでないとしても、教育観、子ども観などを問い直し、教師としてのあり方を考えていく上で重要なものであると言う。そして、身体感覚を通して考えていく演劇的手法には、教師としてのあり方の探求を行う上で、独自の強みがあると述べられている。今回のプログラムは、参加した教師の反応やふり返りの記述を見ると、「全体プログラム」の「20年後の自分になってみる」という活動が、教師自身の、1人の人間としてのあり方の問い直しともなっており、「ありたい自分」の捉え直しが起こっていた。また、1月の「全体プログラム」の番組制作のグループ活動は、これからの教育や社会について考える活動、1月の「教師プログラム」の活動案作成は、生徒にどんなことを感じ、考えてほしいのかを形にする活動であり、教師が今後、目の前の生徒や教育とどう向き合っていくかを考え直す機会にもなったようであった。知識注

入型の教育から主体的で能動的な学びへと、教育や学びに対する捉え方の転換が必要となる教師たちにとっては、このような③の要素を含んだ体験は大きな意味を持つと思われる。

今回の実践は、JSFのオンライン化の試行が1つの目的であったが、オンラインであるということを超え、教師と生徒が共に学ぶ研修の形や、教師が自分のあり方を問い直す研修の形としての可能性も見出された。JSFの対面によるプログラム再開後の事前学習やフォローアップ研修としての可能性だけでなく、オンライン独自の研修の可能性も広がったと言える。今後も、オンラインにおける「体験的な学び」を取り入れた研修や、そうしたプログラムを企画・実施していく教師に向けた研修のプログラムデザインについて探求を続けていきたい。

付記：オンライン JSF の12月の「全体プログラム」における生徒の気づきや学びについては、第30回小出記念日本語教育研究会（2021年6月27日、オンライン）にて口頭発表を行った。

#### 〔注〕

- <sup>①</sup> 1月の「全体プログラム」と「教師プログラム」には、JSF対象国の国際交流基金の日本語専門家および現地講師のうち希望者がオブザーバー参加をした。1月の「全体プログラム」は参加教師が3名だったため、現地講師1名が教師グループに入った。他のオブザーバーもグループを作り、参加教師と同様の体験をした。
- <sup>②</sup> 12月の「全体プログラム」に参加していない教師には12月の「全体プログラム」の録画を視聴していただくことを事前課題として課した。

#### 〔参考文献〕

- 木谷直之・築島史恵・二瓶知子（2018）「ASEAN 5 各国の日本語教師たちによる21世紀型能力の評価ー「コラボレーション（Collaboration）」のルーブリックを作成する試みー」『国際交流基金日本語教育紀要』14、107-114
- 黒田朋斎（2020）「参加者が体験から学ぶノンネイティブ日本語教師研修の試みーにほんご人フォーラム2019 教師プログラムの実践報告」『イマ×ココ』8、76-87
- 高尾隆（2017）「インプロヴィゼーションと学びの関係デザイン」川嶋裕子編『〈教師〉になる劇場ー演劇的手法による学びとコミュニケーションのデザイナーー』フィルムアート社、133-156
- 中尾有岐（2019）「共通言語が初級の多国籍集団の間に共創型対話は生まれたのかー東南アジア5 各国と日本人高校生によるプロジェクトワークの実践からー」『国際交流基金日本語教育紀要』15、7-22
- 渡部淳+獲得型教育研究会（2018）『AL 型授業が活性化する参加型アクティビティ入門』学事出版
- 渡部淳（2020）『アクティブ・ラーニングとは何か』岩波新書
- 渡辺貴裕（2017）「演劇的手法と教師教育との結びつきー教師としてのあり方の探求という可能性」川嶋裕子編『〈教師〉になる劇場ー演劇的手法による学びとコミュニケーションのデザイナーー』フィルムアート社、113-129